



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「コロナ禍」における大学生生活の始まり：全学教育の学生はどのように生活を築こうとしたか
Author(s)	浅川, 和幸; 崎田, 嘉寛
Description	2021/06/22 24ページ目が落丁していたため、PDF差し替え
Citation	北海道大学教職課程年報, 11, 1-25
Issue Date	2021-03-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/80972
Type	departmental bulletin paper
File Information	020_2185-9809_11.pdf



「コロナ禍」における大学生活の始まり

——全学教育の学生はどのように生活を築こうとしたか——

浅川 和幸・崎田 嘉寛

1. はじめに

2020年度は、世界の大学教育に大きな変化をもたらした年度として記憶に残るだろう。そして、日本における「新型コロナウイルス」感染拡大は、大学そのもののだけでなく、学生の生活にも深刻な影響を与えた。これは現在も進行中である。

「コロナ禍」が特に、この年度に入学した学生の大学生活を開始する入り口の段階に、大きな困難を与えたことは想像に難くない。本研究は、新入生を対象として、「コロナ禍」の大学生活に対する影響を考察している。

北海道大学（以降は、単に北大とする）の教職課程委員会が、独自でアンケート調査を実施し、それを取りまとめた成果を教職課程年報という場において公開する経緯について、最小限のことを触れておきたい。

北大は開放制の教職課程を有している。そして、今後も維持していく予定である。しかしながら、近年、教職課程は、課程そのものの存立に関わる大きな変化に直面している。教育政策やそれを巡る動向も含めて情報収集をするだけでなく、教職課程の実施体制の見直しのために、学生の履修の在り方をモニターする必要があると考えている。そのために、数年前から履修した学生からの教職課程に対する感想・要望のデータの収集を始めた。教職課程の締めくくりの科目である「教職実践演習」の末尾に、教職課程への感想や要望を記述してもらう形である。今回のような授業アンケートは、初めての試みである。

ところで、現在の教職課程が視野に入れるべき問題について、手短に3点確認しておく。

第1に、現在進行中の教育政策の変更に、教職課程も深く組み込まれている。教職課程への外部からの様々な要求も、これを背景にしている。教育政策の変更は、グローバル化に加え、新技術による社会改革（例えば、「society 5.0」）に対応可能な「人材育成」を企図し、学校教育の制度自体も視野に入れた大がかりなものである。学校における「人材育成」の担い手は教員である。教員養成制度全体におよぼ変更、そして強化が打ち出されている¹。軌道修正の入り口として、教職課程（養成段階）は戦略的に意味づけられている。そのため、教職課程の適切な運営や改善を進めなければならない圧力が増している。

¹ 他方において、相次ぐ教育改革の遂行を求められる教員の働き方が「ブラック労働」であることは周知のものとなっている。教員の「働き方」改革を進める動きも始まっているが、教員採用試験の倍率は下がっている。すなわち、教員養成全体への要求が高まること（大学の教職課程についても同様）と、学生にとっての教員の魅力低下が逆方向を向いた形で現れている。教職課程の履修を、初年次から厳格にすることによって、学生の教職課程からの離脱が促されるという矛盾である。また、北大からも、「北海道教員育成協議会」に委員を派遣しているが、同じような構図で協議会の議論が再現される。一方で大学教職課程への厳格な実施と、他方で採用試験受験者の拡大が同時に求められる事態である。

第2に、現代日本の宿痾となった「人口減少」は、教職免許の授与体制（≡教員の供給体制）に影響を与えるようになった。大学の経営環境の悪化への対策に、教職課程の新設や維持は生き残り策として関係し、大学を超えた教職課程の再編すらも遠望されるなかに、北大の教職課程も巻き込まれていく²。このことは、研究大学である北大の教職課程が、教職課程を有する大学群のなかでどのような位置を占めるべきなのか、どのような教員を輩出するべきなのかについて考えを持たなければならないことを要請していく。

第3に、開放制教職課程が抱える構造的な問題³は、今日的な形態で表面化するようになっている。2000年代中盤から進められた法人化を中核とする大学制度の新自由主義改革は、大学教育の質的变化⁴をもたらした。それは必然的に、「できるだけ少ない労力で単位を取得できればそれで良い」という履修態度（「コスパ的履修観」）を生み出し、職業資格を取得するための教職課程とのズレがより顕著になっている⁵。日本の大学生は、「4月一括雇用慣行」という形で表現された大企業（職業資格は必要としない）への就職をゴールにして、自らの広い意味での「学び」を調整している。それは、大学において数少ない業務独占資格（教員免許）を供給する教職課程との剥離を強めつつある。従来のような「つつがなく免許さえだしていれば良い」という教職課程では目立たなかった。しかし、厳格な履修が求められ、それを誠実に遂行しよう観点からは、一部の学生の履修態度は「問題がある」（より端的には「目に余る」）状況になっている。さらに、1年次後期に開始される「教職入門」での履修者が、「教職はブラック労働」であるという事実を殊更重視する風潮も相まって、最後の履修科目である「教職実践演習」にたどり着く率は減ってしまう⁶。

前述したようにこれら変化が、教職課程を運営するだけでなく、その影響（学生の履修状況等）を持続的にモニターする問題意識を生み出した。今年度は、「コロナ禍」が大学生活自身に与えた影響を確認するという意味ももたせ、教職課程に位置付く座学科目（「体育学B講義」）において、「新型コロナ

² 18歳人口は今後20年間で激減（120万人から90万人へ）する。これが大学経営を直撃する。教員免許は、特に中小の私立大学の大学経営（入学者の確保）上、重要な意味をもっている。すなわち、「人口減少」は大学経営という回路を経由して、教員を供給する体制に再編を迫る。これに、小中一貫の『義務教育学校』の設置（これも「人口減少」対策である）や小学校の教科担任制は、免許制度そのものの再設計にも連動する。

³ 教職課程の履修者は、4年間で教職課程に固有の単位として、およそ1年分の単位（約30単位）を余分に取得する必要がある。そして、専門職である教員の能力的な質保証は、大量の免許取得者から採用試験で選択することによって行われるという特徴をもつ[橋本、2009]。そのため、採用試験の倍率は構造的に高い。そこから「適性者」が選抜される。免許の取得は教員としての雇用に直結しない。そのため多くの履修学生にとって、免許はいざと言う時の雇用の「安全保障」の意味しか持たない。

⁴ 大学自らが、大学教育を教育サービスの一種として表現し、それを学生・保護者が文字通りに受け取る理解は広がっている。

⁵ この緊張は、現在の学校現場の困難に抗することができる教員を輩出したいという教職課程担当教員と「コスパ的履修観」をもった学生との間（教員－学生間）だけではなく、教員になる希望をもってそのため一所懸命に学ぶ学生との間（学生間）にも横たわる。履修モチベーションの構造的に低い学生が、教員を目指す学生の真剣な履修の障害になる（「水をさす」）場合も多い。

⁶ 学生が民間就職を考える際の情報リソースは、主に就職紹介企業である。学生も、就社後に転職も含めて、働く場所を豊かにするためにどのようなことが必要かには思い至らない。学生の関心は、企業選択次元に集中してしまう（「お買い得な就職先はどこか」）。そのため、世間で話題となっている教員＝ブラック労働という理解は過剰に受け取られてしまう。筆者が現状の教員の労働過重を肯定するものではないことは、言うまでもない。教員がより良い教育を行うために、（職場も含めた）自らの仕事を改善可能な「ゆとり」が必要である。そして、このことも教職課程において考えさせる講義が必要となっている。

ナウイルス」感染拡大に応じた大学の閉鎖と、その後の全面的なオンライン授業についての簡単なアンケート調査を実施することにした。アンケートではことさら、教職課程という意識づけはしていない。まだ、教職課程の冒頭講義（「教職入門」は後期開始）受講前であることを考慮した。

ところで学外から閲覧する方のために、北大の学生の特徴について、最小限の、だが重要な説明をおきたい⁷。

入学試験は、学部別でも行われている。しかし、「総合入試」という大きな枠（「文系総合」と「理系総合」の2つ）が大きな位置を占める。「総合入試」は、大学志願時に学部を決定しないですむことを重要視する志願者を狙いとした入試形態である。そして、入学後に「全学教育」が行われるが、この「全学教育」の1年次で履修した成績評価に基づいて算出される通称「移行点」の高低によって、移行先の学部・学科が決定されることになる⁸。そのため、1年次学生にとって、移行先を考えることと、それを可能にする成績評価（良い成績をとること）は最重要なものとなる。例年、それを意識した履修の仕方（戦略を立てること）に工夫を凝らす。サークルやバイト先等の上級生や同級生のネットワークがこれに動員される。

学生の出身地を紹介する。2020年度の入学者において、北海道は3割強（33.0%）である。これに関東が3割弱次ぐ（26.4%）。以下、北陸・中部と近畿が並ぶ（13.6%、12.7%）。中国・四国、東北、九州・沖縄は少ない（4.8%、4.0%、3.0%）。これに「帰国子女入試」や「外国人留学生」等を加えて100%となる。北海道のうち、札幌市はこの3分の2を凌駕すると考えられる〔浅川、2014〕。北海道は広域である。実家からの通学圏は、この札幌市とJRで通学可能な範囲に限られる。このように考えるなら、約2割の学生のみ自宅通学が可能で、残りの約8割の学生は他地域から来札し、マンション・アパート等で独り暮らしを始める事になる。要点は、大学における学生関係を8割の学生はゼロから始めなければならないという事実である。ところで、授業開始はゴールデン・ウィークを過ぎ、「オンライン」でしか授業が行われなかった。これは、来札するかどうかという点にも大きく関わったものと思われる。

この独り暮らしで大学生活を始める学生を「北大生」にして行くものとして、大学が意識しているものは、2つある。それは北大「ガイドブック」でも強調されている「イベント」（「四季折々のイベントがあなたの学生生活を彩ります。」76・77頁）であり、体育系・文化系の「サークル」（「生き生きとした学生生活を送るために。」同前）である。

前置きが長くなった。それでは、2020年度の北大の前期課程において、大学生活を始めることになった学生たちの授業アンケートを元に、「大学生活」の構築がどのようなものとなったのかを、考察しよう。「例年同様」の形で「学生生活」を、開始できず、オンライン講義を受け、様々な行事も中止・禁止となるなかで、学生がどのように「学生」となっていった（なれなかった）のだろうか。以下の記述は、基本的に報告作成時点のものであるが、追加的にデータが判明したものについては注記して補足した。

2. 本研究報告の趣旨

⁷ 北大を志望する高校生向けのものとして『とって北大生』（2018年版）が、より詳細なものとして「学生生活実態調査報告書」（2018年版）の「概要版」と「詳細分析編」がある（公開されている）。『とって北大生』のURLを掲げておく。https://www.hokudai.ac.jp/gakusei/pdf/201014_tottemo2018.pdf

⁸ 移行点の高い学生から学部・学科定員を見たとし、定員一杯となった時点でその学部・学科は満了となる。

この報告書では、7月初旬時点（「春ターム」終了期）での、初年次学生を中心とした一部の学生の学習と生活の状況を明らかにしている。

今後さらに深刻になるであろう「コロナ禍」が、大学生活の当初において、学生生活に与えた大きな変化はどのようなものであったのか。同時に、北大が大学として、学生生活の立ち上がりをどのようにサポートしたか、何ができなかったのかを明らかにする。そのことが、来年度には改善された形で学生の生活の立ち上がりをサポートする方針を大学が考えるための一助となれば望外の喜びである。

3. アンケート調査の方法

アンケート調査は、以下の方法で行った。

アンケート調査の対象者は、「体育学 B 講義」の履修者である。「体育（学 B 講義）」は教職課程において、免許法施行規則第 66 条の 6 に定める必修科目である。もちろん、教職課程科目として理解せずに履修している学生も多い。

「体育学 B 講義」は 2020 年度前期に 3 つのコマで開講された。そのひとつを履修した学生が、アンケート調査対象となっている。また、「体育学 B 講義」は 2 人の教員で行われた。先行する教員分の「春ターム」の講義終了時点（7 月 2 日）に調査は行われた。

履修者は、履修登録時点で 108 人であった。履修取り消しが 3 人いたため、結果的に 105 人の履修が確定した。また、「春ターム」の課題提出者は 93 人であった。12 人が課題提出に至ることができなかったわけである（修了率 88.6%）⁹。

この課題提出者 93 人のうち、1 年次学生は 76 人であった（81.7%）。同様に、2 年次学生は 12 人（12.9%）、3 年次学生 2 人（2.2%）、4 年次学生 3 人（3.2%）であった。

アンケート調査の周知方法は、7 月 2 日締め切りの課題の提示と共に、「課題提出後にアンケートにご協力ください」という周知文を添付した。調査研究の目的（「大学生活の当初において、学生生活に与えた大きな変化を明らかにする」）のために、アンケート調査は自由記述を中心とする簡単なものとした。また、無記名で、性別も学年も記載を求めていなかった。自由記述を書きやすくするためにそのようなものとした。

このアンケート調査の目的からすると、学年の記載を求め、1 年次学生のみを集計する方法もあった。しかし無記名等で、自由記述を「自由に書いてもらう」という考え方を優先させた。アンケート調査に回答してくれた学生のうち実際、1 年次学生がどの程度の割合も占めたのかは判らないが、潜在的にはこの約 2 割を占める 1 年次以外の学生の動向が、全体を曖昧にし、「N.A.」等の回答が多くなったことに結び付いたことは想像に難くない。

アンケートに締め切りを設ける形はとらず、7 月 9 日に打ち切った。アンケートの収集は、北大の学習情報システム（ムードル）上で、グーグルフォームの形式で学生に入力してもらった。アンケートの

⁹ 体育学 B は講義科目である（体育学 A は実技科目）。今年度の履修状況を考える参考として、前年度までの履修データを掲げておく。平成 29 年度は、前期の履修者が 119 人、後期の履修者が 526 人であった。同様に、平成 30 年度は前期 152 人、後期 478 人。令和元年度は前期 222 人、後期 480 人。そして今年度の前期が 303 人である。本年度は体育学 A（実技）がオンラインとなったため、体育学 B（講義）に履修者が集中したと考えられる。この 88.6%という修了率は例年に比して、大きな変化はない。

内容は報告書末尾に掲載する。

アンケートに回答した学生は 65 人である（課題提出者 93 人を母数とした場合の回収率は 69.9%である）。7 月 2 日に 64 人が回答し、7 月 3 日に 1 人が回答した。その後に回答した学生も 2 人いるが、ここでは集計の都合上割愛した。

4. アンケート結果

繰り返しになるが、アンケート調査の対象となった履修者 93 人のうち、1 年次学生は 76 人であった（81.7%）。同様に、2 年次学生は 12 人（12.9%）、3 年次学生 2 人（2.2%）、4 年次学生 3 人（3.2%）であった。回答者数は 65 人である。アンケート調査には学年の記載を求めている。そのため、この結果は 1 年次学生のみのものではなく、あくまでも「体育学 B」の履修者のものである。

4-1 現在居住している場所

図表1 現在居住している場所

	度数(人)	内訳(%)
札幌市等の通学圏	46	70.8
実家	18	27.7
それ以外	1	1.5
合計	65	100.0

調査時点で学生の居住している場所を聞いたのが図表 1 である。札幌市等の通学圏に居住しているものは、約 7 割である。ここには元々札幌市に居住していた学生と、本州やその他道内から札幌市等の通学圏に移動を済ませたものを含んでいる¹⁰。

北大学務部は「学生生活実態調査報告書（詳細分析編）」（2018 年度版）を発行している。それによると、住居形態は自宅が 24.8%である。この割合が、そのままあてはまると仮定するなら、「札幌市等の通学圏」の 70.8%の 3 割強が札幌市等の通学圏の自宅にいることになる。大まかに見取り図を描くのであれば、学生の 4 分の 1 が札幌市等の通学圏の自宅にいた。5 割弱の学生は出身地を離れ、北大近辺のアパート・マンションや下宿等での独り暮らしをしていた。4 分の 1 強は本州等の実家にとどまっていた、となる。

北大は、6 月 26 日に「対面授業出席のための通学圏内への移動について」を発した。7 月 10 日から「授業の一部を対面により実施する場合があ」るため、「現在、通学圏外に滞在している方は、対面授業への出席に対応できるよう通学圏内への移動をお願い」した。「対面授業」が、実際どの程度実施されたのかは現在のところ不明である¹¹。また北大は、「対面授業」が実施された場合にも、同時にオンラインで受講を続けることができるようにすることを教員に求めた。そのため、学生は自分の履修科目に「対

¹⁰ 前述したように北大は学生の出身地構成において北海道が少ない点に特徴がある。約 3 割の学生が北海道出身で、その内のおよそ 3 分の 2 が札幌市とその周辺出身である。すなわち、自宅通学者は少ない。

¹¹ 全学教育担当教員に配布された「第 1 学期全学教育科目オンライン授業実施状況調査結果」によると、「対面授業」の実施は 2.2%で、これに「オンライン授業」と「対面授業」の併用の 6.4%を加えても 10%に満たない。

面授業」がある場合には、実家から札幌市に移動するかどうかの判断を求められることになった。「対面授業」がない場合は、経済的な問題や生活上の問題、特に後述する日頃のコミュニケーション（関係性、実質的には友だち）が地元（実家）で展開している場合には、札幌に移動するか、実家に止まるかの判断が分かれるところであっただろう。

アンケート調査が行われた時点は、札幌市への移動（転居）をどうするか判断や、実際の移動の最中であつたかもしれない。数として、4分の1強の学生は本州等の実家に居住していた。

図表2 実家の場合の道内／道外の区別

	度数(人)	内訳(%)
道内	4	22.2
道外	14	77.8
合計	18	100.0

調査時の居住地が実家の場合の道内／道外の区別が図表2である。道外が約8割である。道内であっても、実家に戻っている学生もいる。繰り返しになるが、北海道は広い。

道外で都道府県が記載されていたものを列挙すると、関東圏が5人、関西圏が2人、中部圏が3人、東北圏が2人、中国圏が1人、四国圏が1人となる。

道内で市町村名の記載があつたものは2人で、共に旭川市であつた。

4-2 日頃の生活習慣とその変化

以下、簡単な形式で生活習慣とその変化を聞いた結果を図表3～6に示した。ただし、この結果が、「コロナ禍」の影響を直接的に表しているかどうかは判らない。「コロナ禍」の影響と、親元を離れて独り暮らしを始めたことによる変化との、区別がつかないからだ。また、あくまでもこれらのことは主観的評価である。

図表3 日頃の生活習慣（規則正しい生活ができている）

	度数(人)	内訳(%)
はい	39	60.0
いいえ	26	40.0
合計	65	100.0

まず、「規則正しい生活ができている」と考えている学生は6割に止まっていた。オンライン授業の弊害として、課題が多く学生が負担を抱えているという話題は既に多く挙がっている。北大高等教育推進機構高等教育研修センターによる「学生はオンライン授業をどう捉えているか」（7月9日資料）で明らかにされた学生の生活時間においても、オンライン講義の課題が生活時間を、特に睡眠時間を圧迫しているという事実が指摘されていた。しかし、この点を正確に把握するためには、より多くの資料を収集する必要がある。特に、北大には、成績で移行学部・学科が決定されるという「総合入試」の仕組みがある。「コロナ禍」であっても、この仕組みの影響下に学生はある。移行先と成績の関係で学習量を決定するという戦略性に、「コロナ禍」がどのような形で影響しているのかという観点か

らの分析も必要であろう¹²。

しかし敢えて6割に止まっていると書いたが、ここは違う可能性もある。北大の新入学生等の生活習慣の「相場」が判らないからである。類例があれば、比較が可能であると思う。

図表4 日頃の生活習慣(定期的な運動をしている)

	度数(人)	内訳(%)
はい	18	27.7
いいえ	47	72.3
合計	65	100.0

次に、「定期的な運動をしている」と考えている学生は3割弱に止まっている。これは少ないと考えて良いかもしれない。一般的に考えても、「コロナ禍」で外出自粛が求められていた。大学における部活・サークル等の活動が認められたのは、7月10日に至ってからのことであったが、ここでも「屋外での個人練習に限って認める」という限定付きであった。運動不足の問題が健康にどのように係わってくるかは、学生の検診結果と対応させて考える必要があるだろう。

図表5 日頃の生活習慣(ゆっくり睡眠ができています)

	度数(人)	内訳(%)
はい	38	58.5
いいえ	27	41.5
合計	65	100.0

「ゆっくり睡眠ができています」と考えている学生は6割弱である。4割を超える学生がゆっくり睡眠できていない。ここに、オンライン授業の弊害が係わっている可能性がある。

図表6 日頃の生活習慣(食生活に変化があった)

	度数(人)	内訳(%)
はい	33	50.8
いいえ	32	49.2
合計	65	100.0

最後になるが、「食生活に変化があった」と考えている学生は約5割である。これも「コロナ禍」との関係はつかめない。しかし、図表は省略するが、現在の居住地とは大きく関係している。「札幌市等の通学圏」居住の学生で「食生活に変化があった」は60.9%であるのに対し、「実家」居住の学生で「食生活

¹² さらに、今後の継続的な調査研究の論点を提案するなら、従来から全学教育の学生は、先輩からの情報提供や同学年での情報共有を元にして、履修戦略を決定せざるをえなかった。今回の「コロナ禍」でこの集団性を発揮できないことが、どのように修学に影響したのかという点は見逃ごせない。学生の個別化・孤立化が与える影響はどのようなものか、という論点である。このような意味で、初年次学生への「コロナ禍」のインパクトの縦断的な調査研究、極端な表現を借りれば、「初期に北大生になれなかった学年」がどのように「北大生となっていったか」の研究の必要性がある。この後の、履修・修学という狭い観点にとどまらず、学生生活4年(以上)を見通した影響の追跡の必要性が高い。これとの対比で言えば、2年次以上学生にとっての「コロナ禍」のインパクトとの比較研究が意味あるものとなるだろう。この2つが揃って、今後の学生生活を支える大学の貢献の方向が見えてくる。

に変化があった」は 27.8%にすぎない。「札幌市等の通学圏」の学生には、独り暮らしを始めた学生が多数含まれることから考えて、その変化に加えて、「コロナ禍」による外出自粛＝自炊の変化が影響を与えたと考えるのが妥当だろう。

この数字は、ここまで検討した規則正しい生活、運動、睡眠と合わせて、さらに一日中 PC の画面を見続けなければならないという生活がどのような健康状況を生んだのかについて、視力を含めた健康と精神的な影響に、大学が関心をもつ必要性を示唆している。

4-3 日頃のコミュニケーションとその変化

ここまで問題にしたように生活の変化として重要であるのは、新生活を始める（生活の場所を変え、同時に独り暮らしをする）際に、「コロナ禍」によって個別化・孤立化が迫られたということである。これを免れることができたのは、実家が「札幌市等の通学圏」に存する学生だけであり、北大の場合はそのような学生は少ない（2 割に止まる）ということであった。学生が学生である根拠は、集団的（集団という明瞭な形をとっていない場合でも、communicative な存在）であることだ。

その点が、「コロナ禍」によってどのようになったのかということを検討する。

図表7 日頃のコミュニケーションの機会の多さ(「同じクラスの学生」)

	度数(人)	内訳(%)
はい	4	6.2
いいえ	61	93.8
合計	65	100.0

図表7は「日頃のコミュニケーションの機会の多さ」を同じクラスの学生について聞いたものである（質問は「多いですか」に対する「はい」、「いいえ」で回答。図表10も同様）。

ほとんどの初年次の学生にとって、同じクラスの学生に会った機会は、慌ただしい「入学手続」のときだけであっただろう。そこから、大学は事実上の閉鎖に突入した。オンライン授業が始められたのは、ゴールデン・ウィーク終了後の5月10日であった。そして7月10日までは、オンライン授業しか行われていない。

そのことが表れた数字であろう。6.2%は少ないが、同じクラスの学生に札幌市所在の同じ高校の卒業生が含まれることもあるので、この数字になっているのかもしれない。また、オンライン授業においても、教員によってはZoom等のテレビ会議システムを使用した双方向のオンライン授業で、学生間のつながりを促したりする場合もあったであろう。また、「入学手続」時に何とか、「クラスLINE」を作った場合も皆無とは言えないだろう。

従来から、北大においては、全国から集まる学生たちが学生生活に定着する上で、言わば「北大生になる」上で、諸行事群は重要であった。しかしながら、今年度の初年次学生にはそれが欠けた。このことが、学生生活を構築する時期に与える影響が大であることを心しておく必要がある。

「同じクラスの学生とのコミュニケーションの方法」を聞いたのが図表8である。直接会うのは3人に止まる。

新型コロナウイルスの感染拡大を受けた法に基づく緊急事態宣言は、4月17日に発令された。北海道は感染拡大状況にあったため「特定警戒都道府県」に指定され、緊急事態措置は5月31日まで延長

になった。調査の実施は7月の初旬である。しかし、同じクラスの学生に限定すると、直接的なコミュニケーションはない。初年次学生にとっては、「対面」のつながりは始まっていないと言える。試しに、クロス図表を作成してみた。

図表8 「同じクラス学生」とのコミュニケーションの方法

	度数(人)	内訳(%)
オンライン	54	83.1
直接	3	4.6
N.A.	8	12.3
合計	65	100.0

図表9 「日頃のコミュニケーションの機会の多さ(同じクラスの学生)」
×「コミュニケーションの方法」のクロス表

			コミュニケーションの方法		合計
			オンライン	直接	
日頃のコミュニケーションの機会の多さ(同じクラスの学生)	はい	度数(人)	4	0	4
		内訳(%)	100.0	0.0	100.0
	いいえ	度数(人)	50	3	53
		内訳(%)	94.3	5.7	100.0
合計		度数(人)	54	3	57
		内訳(%)	94.7	5.3	100.0

表頭が「コミュニケーションの方法」で、表側が「日頃のコミュニケーションの機会の多さ(同じクラスの学生)」である。

見て明らかなように、「コミュニケーションの機会」が多い学生でもっとも、「コミュニケーションの方法」は「オンライン」である。逆の考え方もできる。「コミュニケーションの機会」を多くできるのは、「オンライン」だからである。学生の「同じクラスの学生」とのコミュニケーションは「直接」会って行える形には全くなっていない。

「同じクラスの学生」を、「同じクラス以外の方」に換えて検討してみる。

図表10 日頃のコミュニケーションの機会の多さ(同じクラス以外の方)

	度数(人)	内訳(%)
はい	30	46.2
いいえ	35	53.8
合計	65	100.0

この「同じクラス以外の方」は、残余という意味で何でも含まれる(内訳については後述する)。これで見ると、「コミュニケーションの機会」が多い学生は、半数に迫る。しかし、ここまで拡張しても「いいえ」が5割を超えるという点に注目する必要があると思う。半数の学生には、学生同士でのという範囲はもとより、そもそもコミュニケーションの機会が多い相手、話し相手さえいないのである。

「札幌市等の通学圏」と「実家」で、「同じクラス以外の方」との「日頃のコミュニケーションの機会

の多さ」を比較してみる。「札幌市等の通学圏」では多い学生が 52.2%、「実家」では 33.3%である。地元（実家）に所在しているからといっても、コミュニケーションの機会が多いわけではない。大学生の年齢になると、家族と話すにしても機会が多いとは限らないのだろう。高校の同級生だった方にしても、本人同様、進学を機に、他の地域に移動している場合も多い可能性もある。

図表11 「同じクラス以外の方」とのコミュニケーションの方法

	度数(人)	内訳(%)
オンライン	45	69.2
直接	19	29.2
N.A.	1	1.5
合計	65	100.0

コミュニケーションの方法でも、「オンライン」が 7 割弱を占める。図表は省略するが、これは実家にいても大差はない。「同じクラス以外の方」というのが、大括りすぎるため、弁別能力に欠けるということもあろう。「同じクラス以外の方」の内訳の検討の前に、図表 9 と同様のクロス図表を作成してみる。

図表12 「日頃のコミュニケーションの機会の多さ(同じクラスの学生以外の方)」
×「コミュニケーションの方法」のクロス表

			コミュニケーションの方法		合計
			オンライン	直接	
日頃のコミュニケーションの機会の多さ(同じクラス以外の方)	はい	度数(人)	17	13	30
		内訳(%)	56.7	43.3	100.0
	いいえ	度数(人)	28	6	34
		内訳(%)	82.4	17.6	100.0
合計		度数(人)	45	19	64
		内訳(%)	70.3	29.7	100.0

「同じクラス以外の方」に範囲を広げると、「日頃のコミュニケーションの機会の多さ」が多い学生だからこそ、コミュニケーションの方法は「直接」が増える。図表 11 と数値が少し異なるのは、クロス図表では「N.A.」が省略されているからである。

それでは、「同じクラス以外の方」の内訳を検討してみる。方法は、「同じクラス以外の方」を自由記述でうかがった。これを、複数回答と同様の扱い方をして計上したのである。この割合を検討する場合に問題となるのは、計上された数ではなく回答者の数＝母数である。この場合は 65 人である。

「N.A.」が 2 人あった。残る学生 63 人が回答した。それぞれを関係性に注目して分類・集約した。

多いものは、家族である (43.1%)。以下は、様々な関係の「友人」が上がる。挙げられた関係性をそれぞれ別物と考える (例えば、「地元の、高校時代の友人」と記述された場合も、関係性の質に注目しているため、別々に、この場合は 2 件として計上している)。「部活・サークル」と関係性のみが記述されていた場合、意味としては友人である場合も考えられるが、単純に「部活・サークル」に計上した。

図表13「同じクラス以外の方」の属性

関係性		度数(人)	内訳(%)
家族		28	43.1
友人	地元	24	36.9
	高校時代	14	21.5
	中学校時代	3	4.6
	大学時代	11	16.9
	ネット上	3	4.6
	記載なし等その他	3	4.6
部活・サークル		6	9.2
バイト		4	6.2
趣味が同じ人		1	1.5
恋人		2	3.1
同じ寮・学生会館等に住む人		3	4.6
N.A.		2	3.1
合計(母数65人)		104	160.0

※ 自由記述で複数挙げられたものを、複数回答として処理した結果である。

このように見て行くと、前出したように「家族」、「地元」の友人（36.9%）、「高校時代」の友人（21.5%）、「大学時代」の友人（16.9%）が多いところである。「家族」と広い意味での「友人」に係性の広がりがあった。

ところで前出の「学生生活実態調査報告書（詳細分析編）」（2018年度版）によると「部活・サークル」（報告書のカテゴリでは「課外活動」）の加入率は73.7%に及ぶ。さらにアルバイトをしている学生は75.5%に及ぶ。ここで、この調査の対象が初年次学生のみではないという点を思い起こす必要がある。それが「部活・サークル」の6人（9.2%）に表れていると考えられる。7月初旬時点では、活動すらままならないのに、新入生歓迎ができていないはずがないからである（オンラインの部活勧誘が存在して、それで加入している場合は想定しなかった）。北大生にとっては、「部活・サークル」や「アルバイト」の社会関係が、「クラス」と並んで学生生活の構成要素である。それが欠けた形で、始まるしかなかったことを物語っている。また、「アルバイト」を始めることができていないことは、学生生活の経済的な基盤が脆弱であることも示唆していると考えられる。

4-4 希望する学生生活から、何が奪われたか

以降では、3つの自由記述を分析する。質問項目を順に掲げる。

第1は、「仮に「コロナ禍」がなく大学生活を始めることができたとしたら、何がしたかったですか。したかったことを教えてください」、である。7月の初旬の時点で、4月からの新生活が始まっていたとしたら、どのようなことをしたかったのかを聞いている。裏を返せば、「できなくて残念だったことは何か」を理解するための質問である。

第2は、「「コロナ禍」に気兼ねなく大学に来ることができるようになったら、何をしたいですか。したいことを教えてください」、である。これは、ここまでは既に失ったかもしれないけれども、得たいと希望していることは何かということを知っている。「コロナ禍」が続くことは前提であるかもしれない。けれども、「諦めたくないことは何か」を理解するための質問である。

第3は、「これからも「with コロナ」の時期が続くと思いますが、どのような学生生活をすごすつもりですか。考えていることがあれば、教えてください」である。この質問は意地が悪い。「これからも「with コロナ」の時期が続くと思う」という形の誘導をした上で、第2の質問との折り合いを聞いた質問である。「現実的な目標」を理解するための質問である。

このような自由記述であるため、第1の質問と第2質問は対比的なものとして考えられる。共に、「コロナ禍」がない場合を想定したものである。このような意味から、両者を同時に、しかも対比的に分析することにする。それが図表14（次頁）である。それを理解した上で、第3の自由記述から現実的な選択を考えてみたい。

自由記述の分析方法は、質的コード化の技法を用いている¹³。元の自由記述は報告書末尾に掲載してあるので参照願いたい。

自由記述の分析と標記の仕方について説明する。ひとりの自由記述を、内容の区別できる最も小さな単位に分解する。ひとりで複数の回答をしたと考えるわけである。その内容を全員分で比較して、同質のものを同じコードとして同定し分類する。さらに、ここで分類したコードも、さらに同質のものとして同定することが可能で、分類できた場合もある。そのため、同じコードという言葉を使用しても、自由記述からの加工（抽象と言い換えても良い）の度合いは異なる。結果として、3種類のコードに区別することになった。

ほぼ、単語しか出てこない「サークル・部活」や「バイト」というコードがあった（「運動する」も同様）。これ以外で「普通の大学生活」、「チャンスに挑戦したい」、「北海道・札幌を味わいたい」とざっくりとまとめることができるコードがあった。さらにもう少し複雑な場合があった。例えば「友人」に係わることが記述されるとき、友人と何をするのかも同時に記述されている場合が多かった。ここでは、「友人を作る」と「友人と楽しむ」と「友人と学ぶ」のようにまとめることができるコード（例えば、「小見出し」のようなものが付けられる場合）があった。この3つの「小見出し」をまとめるとするならば、このように解釈できるのではないかと考えたのが、「友人との出会いと活動」というコードである。言わば「大コード」とでも名付けることができるようなものである。あまり表現はピンとこないところもある。しかし、（未だいないため、作るしかない）友人と共に活動をするというようなことがしたかった、と考えることができるとして、「(大) コード」とした。同様のものとしては、「行事体験」と「大学の学びをしたい」と「大学を体験したい」を考えられた。この「(大) コード」という在り方を採用した上で、「普通の大学生活」というコードを考えると、「小見出し」のようなものが付けられないコードと考えることもできる。

¹³ 質的コード化の技法は、M-GTA分析（修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ）に近いものである。「理論的飽和」に至るほどのケース数がない場合に使用されるものである。コードの適切性という点で万全のものとは言えない。この報告書の場合も、全体で65人の分析に止まり、共通性が非常に高い自由記述もあれば、1人にしか登場しないものもある。このような意味で、生成したコードも暫定的な性格を免れることはできない。ご批判を享受する次第である。そのため、解釈との整合性を確認するために、原文も掲げることにした。文言として短く単純なものについては割愛することとし、3つの自由記述については報告書末尾に掲載する。質的コード化の技法については、高橋亜希子〔高橋、2007年〕をM-GTA分析については、木下康仁〔木下、1999年〕を参照した。

図表 1 4 第 1 の自由記述と第 2 の自由記述の対比（自由記述のコード比較）

内容			度数(人)	内訳(%)	内容			度数(人)	内訳(%)
サークル・部活			26	40.0	サークル・部活			23	35.4
バイト			10	15.4	バイト			3	4.6
友人との出会いと活動	友人を作る		14	21.5	友人との出会いと活動	友人を作る		16	24.6
	友人と楽しむ		12	18.5		友人と楽しむ		7	10.8
	友人と学ぶ		3	4.6		小計(重複は除外)		21	32.3
	小計(重複は除去)		24	36.9		リアルな交流がしたい		4	6.2
行身体験	全体的		2	3.1	大学の学びをしたい	友達と対面で話す		2	3.1
	二次試験		1	1.5		クラスで集まる		6	9.2
	入学式		6	9.2		小計(重複は除外)		11	16.9
	新歓		3	4.6		大学に体験したい		7	10.8
	北大祭		3	4.6		大学施設を利用する		7	10.8
	クラスマッチ		1	1.5		小計(重複は除外)		13	20.0
	小計(重複は除去)		12	18.5		普通的大学生活		3	4.6
大学の学びをしたい	学習の機会		5	7.7	大学の学びをしたい	普通的生活		2	3.1
	大学施設を利用した勉強		2	3.1		チャンスに挑戦		1	1.5
	小計(重複は除去)		7	10.8		運動がしたい		4	6.2
大学を体験したい	大学に触れたい		2	3.1	大学を体験したい	北海道・札幌を味わいたい		5	7.7
	大学施設の利用		4	6.2		特になし、N.A.		7	10.8
	大学に触発されたい		3	4.6		合計(母数:65人)		101	155.4
	小計(重複は除去)		8	12.3		合計(母数:65人)		95	146.2

さらに、内容毎の個別件数を、コード件数として計上する場合は、同一コード内の重複を除外している。この操作によって全体の分布を把握したいと考えた。

「コロナ禍」がなく大学生活を始めることができたとしたら「したかった」と「コロナ禍」に気兼ねなく大学にきることができるようになったら「したい」ことは、1点だけ（「行身体験」）を除き、ほぼ同じコードから成り立っている。ただし、コードは同じでも、選択者数（選択率＝度数／母数×100）は異なる。

改めて、自由記述第1「「コロナ禍」がなく大学生活を始めることができたとしたら「したかった」こと」について説明する。

まず、「コロナ禍」がなく大学生活を始めることができたとしたら「したかった」ことを多い順に挙げてみる。内容毎に量の多いものを確認する。第1位は「サークル・部活」である（40.0%）。第2位は「友人との出会いと活動」（36.9%）である。これに入るものとしては、時間的に先行する「友人を

作る」が多い。第3位は「北海道・札幌を味わいたい」と「行事体験」が並ぶ(18.5%)。納得がゆく内容となっている。北大の新入生が大学に求めているものがよく分かる。以降では、「行事体験」を除く3つを「北大生の三大願望」と呼称した。

これらに、「バイト」、「大学を体験したい」、「大学の学びをしたい」が続いている。

次に、自由記述第2「「コロナ禍」に気兼ねなく大学にすることができるようになったら「したい」こと」を説明する。

同様に多いものの順に挙げてみる。第1位は「サークル・部活」で変わらない(35.4%)。少し量的に減っている可能性がある。第2位は「友人との出会いと活動」(32.3%)でこれも変わらない。これに入るものとしては、時間的に先行する「友人を作る」が多いところも同様である。興味深いのは、「友人との出会いと活動」とは相対的に区別されるであろう「リアルな交流がしたい」とでもまとめることができるコードが分化していると考えられることである(9.2%)。これが加わると考えるなら、第2位は第1位と逆転することになる。学生にとって最も切実な要求は、「友人をつくり、リアルな活動がしたい」ということである。第3位は「大学を体験したい」(20.0%)である。第4位が「大学の学びをしたい」(16.9%)であることに鑑みれば、仮にこの2つを大学という場にいるという固有の意味に係わるとして単純に合算して考えるとすれば、これは「サークル・部活」をわずかながら凌駕するとも考えられる。これも学生にとって最も切実な要求である。

このように、入学から3カ月を経て、北大の新入生が大学に求めているものは、わずかながらとはいえ変化したのである。

格段に減ったのは、当たり前のことであるが、もう二度と行われることがない「行事体験」(18.5%から0%へ)である。さらに、「北海道・札幌を味わいたい」も減少した(18.5%から6.2%へ)である。後者は、観光客としての北大生からの脱皮という意味もあるだろう。

4-5 これからどのように大学生活を構築するか

自由記述分析の最後となる第3の自由記述(「これからも「with コロナ」の時期が続くと思いますが、どのような学生生活をすごすつもりですか」)を検討する。3つの分析を行う。自由記述の加工(抽象化の)方法、は第1・2の自由記述と同様である(次頁図表15)。

第1に、まとめた図表を掲げ、それに沿ってこれからの大学生活の構築の方向性を検討する。

第2に、いくつか重要な問題を指摘した自由記述を、【事例】として分的する。コードを対応させて説明する。

第3に、第2の自由記述(「「コロナ禍」に気兼ねなく大学にすることができるようになったら「したい」こと」と、第3の自由記述(「これからも「with コロナ」の時期が続くと思いますが、どのような学生生活をすごすつもりですか」)の落差を検討する。言わば、「希望と現実の差」の検討である。先に断っておかなければならないが、それぞれの学生の自由記述の直接的な対応関係の形で落差を検討してはいない。あくまでも、第2の自由記述と第3のその意味群の量も含めた対比を問題にしている。

それでは第1の分析から始める。

図表 15 第3の自由記述のコード整理

内容		度数(人)	内訳(%)
コロナから身を守る	感染防止を配慮した生活をする	6	9.2
	運動する	7	10.8
	規則正しい生活を送る	2	3.1
	小計(重複は除外)	14	21.5
対人関係での配慮	オンラインを生かした生活をする	3	4.6
	適度に人と関わる	1	1.5
	孤独に頑張る	2	3.1
	小計(重複は除外)	6	9.2
友達問題	友達を作る	3	4.6
	友だちを作ることができない、諦める	2	3.1
	小計(重複は除外)	5	7.7
経済問題	アルバイトをしない	1	1.5
	アルバイト探す	1	1.5
	お金を貯める	1	1.5
	小計(重複は除外)	3	4.6
生き方を考える	独りの楽しみを増やす	6	9.2
	それなりに生活する	4	6.2
	小計(重複は除外)	10	15.4
学生生活の送り方を考える	充実した学生生活を送る	7	10.8
	困難な時期を忘れずに大学生活を過ごす	1	1.5
	札幌非在住で学生生活を続ける	1	1.5
	小計(重複は除外)	9	13.8
学び方・学ぶ上での課題に対処する	膨大な課題をこなす	5	7.7
	課題を余裕を持ってこなすことができるようにする	2	3.1
	電子機器の使い方をマスターする	1	1.5
	やりたい勉強を見つける	1	1.5
	やりたいことを学ぶ	1	1.5
	授業をしっかり受ける	1	1.5
	自宅で学びを深める学生生活をする	1	1.5
	オンライン授業でできた友人と協力しながら学習を進める	1	1.5
	遠隔授業の課題評価問題で、不安を抱え、心をやられて生きる	1	1.5
	小計(重複は除外)	11	16.9
相談したい		1	1.5
考えることができない		1	1.5
特になし		2	3.1
N.A.		11	16.9
合計(母数:65人)		73	112.3

第1位は、「コロナから身を守る」とでもまとめることができるものである(21.5%)。これらは比較的内容が単純であった。「感染防止を配慮した生活をする」、「運動する」、「規則正しい生活を送る」からなる。

第2位は2つある。ひとつは「N.A.」である。当然、回答をしなかったということであるのだが、質問の仕方(「考えていることがあれば、教えてください」)の問題(「あれば」)もあって膨らんでいとも考えられる。このような意味で、「考えることができない」と同質だと理解してて良いかもしれない。もうひとつが、「学び方・学ぶ上での課題に対処する」(16.9%)である。これは、「膨大な課題をこなす」を中心とするものではあるが、自分にはそれを「受け止めることができる」というポジテ

イブな内容のものから、少数ではあるが「受け止めきれない」という悲鳴のようなものからなる。スペクトル的な内容に、敢えてコードを付与した形である。具体的な内容は、自由記述に直接あたることで深めたい。

第4位は、「生き方を考える」とでもまとめることができるものである(15.4%)。「独りの楽しみを増やす」と「それなりに生活する」からなる。「生き方」と言っても生涯という長いレンジの意味はない。目下の生活を念頭においたものだ。

第5位は、「学生生活の送り方を考える」(13.8%)である。これは「充実した学生生活を送」りたいという誓いにも似たものを中心としている。

第2の分析を行う。

いくつか重要な問題を指摘した自由記述を【事例】として分析する。分類したコードを上部に、自由記述を下部に表記している。

【事例：友だちを作ることができない】

コード：「オンラインを生かした生活をする」、「友だちを作ることができない、諦める」、「相談したい」の3つに分類

インターネットを活用して、人とのつながりを作るしかないかとは考えています。すぐに一人暮らしが始まるけれど、いまだに札幌に知り合いはいないし、対面で友達を作れる機会もなさそうなので、どうやって学生生活を充実させたらいいか、逆に誰かに相談したいです。

コード：「友だちを作ることができない、諦める」と「孤独に頑張る」の2つに分類

対面が再開したとしても、おそらく席は離されるだろうし、密にならないよう必要以上に校内にとどまらないようにされるなど対策が取られるだろうと思うから、正直大学が友達作りなんてできる環境にはならないとあきらめている。浪人時代のように孤独に頑張っていこうと思う。

本州等を出身母体とする北大生にとって「友だちを作る」ことは学生生活を始めることの前提であった。その意味で、それができない(であろう)事態での困難と覚悟について記述したものと考えられる。楽天的な展望を捨てて、何ができるか、何をするか、である。

【事例：大学生活を送る決意を固める】

コード：「充実した学生生活を送る」に分類

これからオンライン授業が続くとしても、金銭や、大学生という貴重な時間が減っていることには変わりはないので、自分から積極的に動き、それらが無駄にしないようにしたいと思う。

コード：「札幌非在住で学生生活を続ける」に分類

6月に大学側から提示された「今学期は原則オンラインで行う」との連絡で、学生会館の入居を取りやめたため、現在札幌での住居が確保できておりません。よって、今学期における学内での活動があった場合は、東京の実家から毎回飛行機での移動、ホテルでの滞在が必要とされます。また、今住んでいる東京都と北大のある北海道大学は緊急事態宣言の解除後も、コロナウイルス感染者の増加が止まらず、都外への移動を大変危惧しております。したがって、今後の授業や学期末考査におきましても、引き続きオンラインでの実施を検討していただけますよう、宜しくお願い致します。また、今後の予定をいち早くお知らせ頂けると大変助かります。

前者が「背水の陣を引く」とでも呼ぶことのできるような決意を固めたと考えることができるなら、後者は今のままと同様の「放送大学である北大を望む」という究極の要望を出していると考えられる。「コロナ禍」で、授業を原則オンラインと定めた北大には、この期待に応える責任があるだろ

う。しかし、それは学生の大学生活にどのような意味をもたらすのか、当面の危機的状態を回避する方策としての原則オンラインが、大学の在り方として期待される事態は、「大学の存立それ自体」（リアルな大学がそもそも必要か）にとってもつ意味を考えることが求められる状況となったと言える。

【事例：現実の修学と学習意欲の在り処】

コード：「膨大な課題をこなす」に分類

家にいる時間が多いので興味のある生物や物理の勉強に取り組みたい気持ちはありますが、実際は毎日大量の課題を出されて睡眠時間を削られ、土日祝日も関係なく課題をこなして一日が終わるという生活を送るだろうと思います。

コード：「膨大な課題をこなす」、「課題を余裕を持ってこなすことができるようにする」、「遠隔授業の課題評価問題で不安を抱え、心をやられて生きる」の3つに分類

冬がオンラインであれば雪を避けることができるため良いとも思うが、後期まで大量に課題を積まれてこんな生活を送るのなら本当に人生選択を後悔しそうで、自身の要領がよくなることを目指す。

「どのような」も何も、そもそも「学生生活」というものが何なのか分からない。

一人暮らしを始め課題のため外出できず、友人も少数で毎日会話がなければ、部活動まじやアルバイトなど生活に入り込む余地はない。

総合理系を選んだ時点で覚悟はしていたが、さすがにここまで想定外であり、私は大学生である実感さえない。

先生方も大変なのは重々承知しておりますが、学生側も一部疲労困憊です。必死に作成した課題がMoodleで永遠に未評価のままとか一言のコメントすらないとか、すごく悲しいですし、改善のしようもないです。「フィードバックをください」というつもりではなく、どれだけ頑張っても評価されないのではないかと不安でいっぱいです。本当に不安しかありません。毎日心をやられております。

このような感想を書く機会が今までなかったのでもうここまで書きましたが、要領の悪い学生の一意見としてご容赦ください。すみませんでした。

前者が「諦念」とでも名付けることができるようなものとするなら、後者は「悲鳴」である。「大学生である実感さえない」は、その通りであるだろうし、このようには記述しなかった多くの初年次学生の気持ちを代弁するものであるだろう。そして、最後の段落は、当面の危機的状態を回避する方策としての原則オンラインに、当面の対処としてではなく、授業の質としても「大学生としての実感」を持てるようなものとして、開講されることを要求しているものとして理解すべきである。最後の段落に記述している「先生方」への遠慮がちな「お願い」は、大学として、この言葉を書かせてしまったことへの贖罪と、今後の改善の誓いとして受け取るべきものとしてあると理解しなければならないだろう。

第3の分析を行う。

第2の自由記述（「「コロナ禍」に気兼ねなく大学にすることができるようになったら「したい」こと」と）、第3の自由記述（「これからも「with コロナ」の時期が続くと思いますが、どのような学生生活をすごすつもりですか。」）の落差、すなわち希望と現実の差の検討である（図表16）。

繰り返しになるが、それぞれの学生の自由記述の直接的な対応関係という意味での落差を検討してはいない。第2の自由記述と第3のその意味群の量も含めた対比である。また、煩雑さを避けるために（大）コード間の比較にしてある。

まず、なくなったものを確認しておく。「サークル・部活」がなくなったことである。「北海道・札幌を味わいたい」も同様である。「北大生の三大願望」であった「サークル・部活」、「友人との出会いと活動」、「北海道・札幌を味わいたい」の2つはなくなった。もっとざっくりとした「充実した学生生活を送る」に溶け込んだ可能性がある。

図表 16 第2の自由記述と第3の自由記述の対比（(大) コードの比較）

内容	度数(人)	内訳(%)	内容	度数(人)	内訳(%)
バイト	3	4.6	経済問題	3	4.6
友人との出会いと活動	21	32.3	友人問題	5	7.7
リアルな交流がしたい	6	9.2	対人関係での配慮	6	9.2
運動がしたい	1	1.5	コロナから身を守る	14	21.5
普通の生活	3	4.6	生き方を考える	10	15.4
大学選択に間違いがなかったことに確信を得たい	1	1.5	学生生活の送り方を考える	9	13.8
大学の学びをしたい	11	16.9	学び方・学ぶ上での課題に対処する	11	16.9
大学を体験したい	13	20.0			
サークル・部活	23	35.4			
チャンスに挑戦	2	3.1			
北海道・札幌を味わいたい	4	6.2			
			相談したい	1	1.5
			考えることができない	1	1.5
特になし、N.A.	7	10.8	特になし、N.A.	13	20.0
合計(母数:65人)	95	146.2	合計(母数:65人)	73	112.3

次に、「友人との出会いと活動」と「リアルな交流がしたい」という願いは縮退し、「諦め」が混在するようになった。

そして、「大学を体験したい」と「大学の学びをしたい」は、「学び方・学ぶ上での課題に対処する」として具体化した。前述したように、「膨大な課題をこなす」を中心としている。期待は「萎んだ」と考えられる。

最後に、「コロナから身を守る」こと、そして「北大生の三大願望」を満たすことが展望できないがゆえに、「生き方を考える」、「学生生活の送り方を考える」という課題が浮上したとも考えられる。

しかしこの解釈は、質問の時系列を固定的に考えた故の過大評価を含んでいるかもしれない。

「「with コロナ」の時期が続く」が続くことが強いられているからこそ、「「コロナ禍」に気兼ねなく大学にすることができるようになったら「したい」こと」が強く祈念されているという、逆説の可能性である。その意味では、「「コロナ禍」に気兼ねなく大学にすることができるようになったら」という仮定の水準ではなく、「本当の願望」として理解すべきものである可能性と言えるのではないか。しかしながら、このアンケート調査では明らかにし得ない。

ここで強調しておきたいのは、広い意味での大学での学びの期待が無くなってしまわないように、全学教育の質的改善に責任をもって取り組む必要があること、である。

そして、このアンケート調査が7月に行われたことと関係しているが、「総合入試」で入学した学生にとっての二つの課題（移行先を考えること、それを可能にする成績評価を勝ち取ること）に関わった言及はされていないことである。

5. まとめとこの調査研究の示唆

短い報告書であるので各項のまとめは省略し、要点のみにする。

第1に、生活習慣に関わる大きな変化の一端は明らかになったと考える。オンライン授業の長期的な影響も含めて、追跡調査の必要性がある。

第2に、「コロナ禍」が学生の日頃のコミュニケーションに与えた影響が非常に大きなものであることも確認できた。「同じクラス」に限定するなら、コミュニケーションは「か細い」と評価できる。

「同じクラス以外の方」をとってみても、孤立が確認できる。全国から集まる北大生にとって、「同じクラス」の友人、「部活・サークル」や「アルバイト」等の社会関係は、学生生活の前提であり、それを作り出していく基盤である。それが欠けた形で、大学生活が始まるしかなかったことは声を大にして指摘しておきたい。また、「アルバイト」を始めることができていない。このことは、学生生活の経済的な基盤が脆弱であることにも影響すると考えられる。

第3に、北大に期待していたことは、その大半が「諦め」に代わった。

まず、初年次学生は北大に、「サークル・部活」、「友人との出会いと活動」、「北海道・札幌を味わいたい」（「北大生の三大願望」）、そして「行事体験」を求めていた。「行事体験」は、「サークル・部活」と相まって、北大生が「北大生になる」上で必須であった。しかし、もうそれは求めるべくもない。

次に、今でも可能なら、「サークル・部活」、「友人との出会いと活動」、「大学を体験したい」そして「大学の学びをしたい」と思っている。

しかし「コロナ禍」の現実を認めるなら、「サークル・部活」や「北海道・札幌を味わいたい」も諦めざるを得ないと考えるに至った。「友人との出会いと活動」と「リアルな交流がしたい」という願いでさえも縮退し、「諦め」が混在するようになった。そして、「大学を体験したい」と「大学の学びをしたい」という希望も、「学び方・学ぶ上での課題に対処する」として具体化されるしかなかったのである。ここが「膨大な課題をこなす」に代わった。この受け止めは、かなり幅があることが示唆されている。最後に、「コロナから身を守る」ことや「北大生の3大願望」を満たすことが展望できないがゆえに、「生き方を考える」、「学生生活の送り方を考える」という課題も浮上している。そしてまだ、「総合入試」で入学した学生にとっての二つの課題（移行先を考えること、それを可能にする成績評価を勝ち取ること）に関わった言及はされていない¹⁴。

今回の調査研究の重要な知見は、他の大学でもそうではあるのだが、北大の場合、学生の大多数（約8割）が入学して学生生活を「ゼロから始める」という特徴に配慮する必要がある点を明らかにしたことであると考ええる。北大生は、「北大生の3大願望」を満たしながら、行事やサークルで仲間をつくって集团的（communicative）に、「北大生になる」のである。この学生生活を始める段階の重要性が確認できた。必然的に、「コロナ禍」においてそれが達成できないことが、今後の学生生活の様々な局面に影響を及ぼしていくことに注視する必要がある。当初に集団性を獲得できないことが、どのように修学に影響するのかという点は見過ごせない。

このような意味で、初年次学生への「コロナ禍」のインパクトの縦断的な調査研究、「初期に北大生になれなかった学年」がどのように「北大生となっていくか」の研究が必要である。これとの対比で言えば、2年次以上学生にとっての「コロナ禍」のインパクトとの比較研究が意味あるものとなるだろう。この2つが揃って、今後の学生生活を支える大学の貢献の方途が見えてくるに違いない。

最後に、蛇足的な補足をする。「コロナ禍」において総合入試＝全学教育の成績による学部移行は、

¹⁴ 例えば、オンラインでテストを行った場合の評価の公平性への言及が考えられる。

学生の修学に重要な問題を突きつけている。教員が過大な課題を課しがちであることもそれと関わっている可能性がある。他方で、「大学設置基準」におけるメディア授業の条件を満たせていない授業があったとして、それがさらに遠隔で評価がなされ、それによって移行先が決定される。これらのことは7月時点では、過大な課題問題としてしか意識されていない。しかし、意識されるに従って、学生の「諦め」をどのように形で変形していくかに注視する必要がある。これらのことに大学として対処する意志があるなら、「コロナ禍」において困難を抱えた中での授業実施であったとしても、実施状況等の調査や問題点の究明と改善、大学からの現実的なサポートに着手することを要請する。

【参考文献】

- 浅川和幸、2014、「大学進学にみる地域格差：北海道を事例に」、『教育学の研究と実践』（北海道教育学会）、9、25-34 頁
- ダイヤモンド編集部、2020 年、「特集 コロナで激変！ 大学 序列 入試」、『週刊ダイヤモンド』（2020 年 8 月 8・15 日号）
- 橋本鉦市編著、2009 年、『専門職養成の日本的構造』、玉川大学出版部
- 堀和世、2021 年、『オンライン授業で大学が変わる ～コロナ禍で生まれた「教育」インフレーション～』、株式会社大空出版（Kindle 版）
- 北海道大学アドミッションセンター、2020 年、『北海道大学 2020 大学案内』
- 市川明代・白鳥達哉・吉脇丈志、2020 年、「コロナで消える 勝ち残る大学」、『週刊エコノミスト』（2020 年 10 月 13 日）
- 木下康仁、1999 年、『グラウンデッド・セオリー・アプローチ 質的実証研究の再生』、弘文堂
- オフィス三銃士編、2019 年、『TJ MOOK 世界の超一流大学は何がすごいのか』、宝島社
- 高橋亜希子、2007 年、「質的・量的分析を組み合わせた仮説生成——総合学習、達成要因へのアプローチ——」（秋田喜代美、『はじめての質的研究法 教育・学術編』、東京図書所収）
- 吉見俊哉、2020 年、「ポストコロナの大学論」、『世界』（2020 年 8 月号～11 月号）

【自由記述】

4. 仮に「コロナ禍」がなく大学生活を始めることができたとしたら、何がしたかったですか。したかったことを教えてください

部活

図書室などの自習スペースで勉強

サークル活動

サークル活動、バイト、北大祭、北海道観光

後期一般入試二次試験、大学祭、クラスマッチ、対面授業、友達作り、入学式、サークル、札幌観光、地元の友達と旅行、バイト

実習

入学式など、なくなった全ての行事に参加すること。

サークルに入って友人を作ること。一人旅行に行くこと。大学の図書館や研究室を覗いて大学の独特の雰囲気を味わうこと

友達とサークルで活動したり、どこかに出かけたりしたかった。

大学で新しい友達をつくること

運動

図書館での勉強

N.A.

バイト、サークル活動

特にない

友達を100人つくる。

N.A.

サークル活動

友人と遊園地に行きたかった。浪人生活を終えた友人に会いに行きたかった。

友達と北海道を全力で楽しみたかった

友人と北大内外の散策。

入学式や新歓などのイベント、サークル活動

部活、バイト、友人と会う

部活(柔道)・クラスでできた友達と遊ぶ

図書館に自由に出入りしたい

図書館にこもって1日中いろんな本を読みたかった。

特になし

人間らしい生活リズムで通学の日々を送り、同じ大学の友人を作って、遊んだりしゃべったり課題の共有がしたい。

入学式

留学や研究室見学

友達を作って一緒に遊ぶこと

図書館で興味のあることについて調べる

運動系のサークル活動

美味しい物巡りをしたかったです。

新歓で、先輩のお金で、ジンギスカンを、食べたかった・・・

入学式

以前からしたいと思っていたことができるサークルに入りたかった。アルバイトを始めてお金を貯めて買いたいものがあった。自分の趣味を共有できる友人と出会いたかった。

友達作り、バイト、サークル

サークル活動、北海道旅行

サークルと友人作り

サークルの新歓に行きたかった。友達を作りたかった。

休暇を利用した旅行

入学式はしたかったです、実家にいたので写真も撮れなかった。

普通の大学生活

4. 仮に「コロナ禍」がなく大学生活を始めることができたとしたら、何がしたかったですか。したかったことを教えてください(続き)

入学式をしたかったです。あと、夏休みの集中講義でどうしても取りたい科目があったのですがなくなってしまいました。

集中講義などのフィールドワーク

サークル活動

友達をつくったり、サークルの活動に打ち込みたかった。

テニスサークル、友達と勉強

友人と遊ぶ、部活動

サークル活動

色々な先生や生徒と話をすること。留学。図書館などの施設をつかう。

新しい友達を作る 部活を思いっきりやる これまでできなかったことを経験したかった

旅行

大学で友人を作り、ショッピングなどをしたかったです。また、サークルを作ってみたかったです。

北海道巡り

広く自然豊かな春の大学内を散歩し、お花見等したかった。

部活やサークル、友達と勉強する・遊ぶ、バイト

アルバイト

部活・サークルやアルバイトなど「新しいこと」に挑戦したかった。こんなに課題に苦しめられないで(生活習慣の乱れも運動不足も睡眠不足も正直重い課題のせい)もっとのびのび学問を学びたかった。仲のいい友人も作りたかった。道外出身なので札幌の良さを感じたかった。趣味も見つけたかった。新しい何かが欲しかったです。課題減らしていただきたいです。

ダンスを習うこと

バイト

N.A.

普通に大学に通いサークルなどに参加して友達を作りたかったです。

学際

5. 「コロナ禍」に気兼ねなく大学に来ることができるようになったら、何をしたいですか。したいことを教えてください

部活

サークル活動と大学施設での勉強

友達と対面で話す

大学探検、クラスメイトと集まりたい、友達を作りたい

友達作り、対面授業、サークル、バイト

部活

友達と顔を合わせて話すこと。

上記のこと&地元の友人といろいろなところへ遊びに行くこと

サークル活動、友達とどこかに遊びに行く

友達作り

ない

図書館での勉強

N.A.

とにかく友達を作りたいです

特にない

友達をたくさん作ってお話すること。

N.A.

サークル活動、対面授業、図書館などで勉強する

友人と食堂でのんびり話がしたい。

友達を作る

5. 「コロナ禍」に気兼ねなく大学に来ることができるようになったら、何をしたいですか。したいことを教えてください
(続き)

散策。北大図書館を訪れる。

友人を作り、私生活を充実させる

部活、友人と会う、

柔道・友達や先輩と遊ぶ・対面で授業を受ける

図書館に自由に出入りしたい

まずは友達が欲しい。

特になし

講義を受けるうえで、生徒間または生徒と教員間にコミュニケーションのある講義が受けたい。図書館を使って文献調査などをしてみたい。

キャンパスを歩く

図書館で本を借りて勉強する

友達を作って一緒に遊ぶこと

図書館で興味のあることについて調べる

授業関係なく、運動がしたい

美味しい物巡りをしたいです。

普通の授業が受けたい。オンライン授業は目が疲れたり、回線の心配とかで何かとイライラする。

キャンパスをあるく

サークルに入りたい。レポートのための調査をしに図書館を訪れたい。自宅以外の場所で食事がしたい。友人をつくりたい。

友達作り、バイト、サークル

北海道旅行

サークル活動、友人作り、留学

サークル活動

図書館の利用

N.A.

とりあえず、友人を作りたい。

アルバイト、サークル活動

サークル活動

大学内の生物の観察、校内探検

北大の校舎を見て歩き回りたい。

友達とご飯を食べる

友人と遊ぶ、部活動

サークル活動

いろんな施設を使う。

オンラインではなくキャンパスで学びたい 多くの人と交流したい

演奏会に参加する

様々なサークルを見て回りたいかったです。

部活かサークルに入りたい。

北海道の名産品や海産物などをおなか一杯に味わいたい。

友達を作る、総合博物館に行く、部活やサークルに入る

北海道を楽しみたい

おともだちをつくります。部活入りたいです。「北大で良かった」「総理(総合理系、筆者注)を選んだ私は間違っていなかった」をいまだ感じていないので、それを得たいです。

集中して勉強

サークル

N.A.

大学生らしく過ごしたいです。

学食

6. これからも「with コロナ」の時期が続くと思いますが、どのような学生生活をすごすつもりですか。考えていることがあれば、教えてください

自分で運動する

あまり飲み会のような場には参加しないようにしようかなと思っています。バイトも生活に困っている人が優先だと思うので、やってみたかったのですがとりあえずやらないことにします。

オンラインの利点をうまく活かして大学生活を送りたいです。

N.A.

インターネットを活用して、人とのつながりを作るしかないと考えています。すぐに一人暮らしが始まるけれど、いまだに札幌に知り合いはいないし、対面で友達を作れる機会もなさそうなので、どうやって学生生活を充実させたいか、逆に誰かに相談したいです。

特になし

規則正しい生活を送る。適度に運動をする。

マスクをつけて、三密を避ける。手洗いうがいを徹底する。感染が拡大しない程度に人と関わる。

まだ考えられていない

N.A.

コロナウイルスに感染しないような学生生活

自分ひとりだけで完結する楽しみを増やす。

N.A.

膨大な課題を淡々とこなす学生生活

それなりに

接触を控えたうえで、自分らしく友達と仲良くなろうと思います。

N.A.

N.A.

できる中で充実した学生生活を送りたい

課題地獄の日々になりそうです

「コロナで学校に行けなかった期間があった」という事実を忘れない大学に通いたい。

もう高校生の時のような後悔はしたくないので楽しみたいです。

コロナ対策をしながらも、全力で大学生らしいと思うことをする。

マスクをして、不必要な外出はしないように心がけて生活したい。

N.A.

やりたい勉強を見つけて、できる範囲で学んでいきたい。

授業をしっかり受けたい

やはりなるべく不要不急の外出を避け、不用意な三密を避け、予防を徹底し、自らが感染源やクラスター源に絶対ならないように心掛けたい。

運動を生活に取り入れたい

オンラインで交流

なるべくリスクのある行動をとらないようにする

鬱にならないように今までやったことのないような、色々なことに挑戦する

一緒に運動できる友人を作りたい

家で学びを深める学生生活を過ごすつもりです。

とりあえずは体力を戻すために運動の習慣をつける

日常生活に運動を取り入れる

アルバイトができないため両親からの仕送りに頼りきりになってしまっているが、本当にふたりに申し訳ないので何か出来るアルバイトがないか探している。

N.A.

できるだけ散歩などに行くようにしたい。

とりあえず新しい友人が欲しいです

N.A.

N.A.

N.A.

6. これからも「with コロナ」の時期が続くと思いますが、どのような学生生活をすごすつもりですか。考えていることがあれば、教えてください(続き)

できるだけ外に出るようにしたい

パソコンなどの電子機器の使い方をマスターしたいです。

おとなしく生きる

読書、英会話、絵、筋トレ

課題をこなすのに必死になっているので、もう少し余裕をもって終われるようにし、規則正しく生活したい。

家にいる時間が多いので興味のある生物や物理の勉強に取り組みたい気持ちはありますが、実際は毎日大量の課題を出されて睡眠時間を削られ、土日祝日も関係なく課題をこなして一日が終わるという生活を送るだろうと思います。

これからオンライン授業が続くとしても、金銭や、大学生という貴重な時間が減っていることには変わりはないので、自分から積極的に動き、それらが無駄にしないようにしたいと思う。

この機会に料理の腕を上げたい

読書をする習慣をつけたい。

3密は避けつつ、密度の高い充実した学生生活を送る

特にありません。

オンライン授業でできた友人と協力しながら、学習を進めようと思っています。娯楽に関しては、家で楽しめることも多いので、一人で趣味のスキルアップを頑張ろうと思っています。

無茶しないでほどほどに過ごしていきたい。

6月に大学側から提示された「今学期は原則オンラインで行う」とのから、学生会館の入居を取りやめため、現在札幌での住居が確保できておりません。よって、今学期における学内での活動があった場合は、東京の実家から毎回飛行機での移動、ホテルでの滞在が必要とされます。また、今住んでいる東京都と北大のある北海道大学は緊急事態宣言の解除後も、コロナウイルス感染者の増加が止まらず、都外への移動を大変危惧しております。

したがって、今後の授業や学期末考査におきましても、引き続きオンラインでの実施を検討していただけますよう、宜しくお願い致します。また、今後の予定をいち早くお知らせ頂けると大変助かります。

対面が再開したとしても、おそらく席は離されるだろうし、密にならないよう必要以上に構内にとどまらないようにされるなど対策が取られるだろうと思うから、正直大学が友達作りなんてできる環境にはならないとあきらめている。浪人時代のように孤独に頑張っていこうと思う。

何事も柔軟に

冬がオンラインであれば雪を避けることができるため良いと思うが、後期まで大量に課題を積まれてこんな生活を送るのならば本当に人生選択を後悔しそうでため、自身の要領がよくなることを目指す。「どのような」も何も、そもそも「学生生活」というものが何なのかわからない。一人暮らしを始め課題のため外出できず友人も少数で毎日会話がなければ部活動ましてやアルバイトなど生活に入り込む余地はない。総合系理を選んだ時点で覚悟はしていたが、さすがにここまででは想定外であり、私は大学生である実感さえない。

先生方も大変なのは重々承知しておりますが、学生側も一部疲労困憊です。必死に作成した課題がMoodleで永遠に未評価のままとか一言のコメントすらないとか、すごく悲しいですし、改善のしようもないです。「フィードバックをください」というつもりではなく、どれだけ頑張っても評価されないのではないのかという不安でいっぱいです。本当に不安しかありません。毎日心をやられております。

このような感想を書く機会が今までなかったのでここまで書きましたが、要領の悪い学生の一意見としてご容赦ください。すみませんでした。

働いてお金を貯めて単身国内旅行をする

与えられたものを着実にする

N.A.

参加できることには自分から積極的に参加します。

自律的生活